

下水道分野における 女性の技術力向上支援の取り組み

女性がもっと活躍する下水道を目指して



あべ ちか
阿部 千雅*

下水道分野で女性が技術力をさらに向上させていくためには、職員自身が下水道のことをさらに深く理解する機会を提供すると同時に、女性ならではの悩みである「仕事を続ける上での見通しの悪さ」を軽減することが特に重要である。これらの課題に取り組む「下水道分野で働く女性の会（愛称：GJリンク）」の活動を紹介する。

1. はじめに

今回の特集テーマは「技術の伝承・技術力の向上」である。様々な職場における技術の伝承・技術力の向上のための取り組みが紹介されると思うが、ここでは少し視点を変えて、「下水道分野に関わる人」というやや広い範囲の、特に女性職員の技術力の向上に向けた取り組みを紹介したい。

ある大学教員の方が「技術が継承されていくためには、受け取る側が学ぶ気持ちになることが大前提」とおっしゃるのを聞いたことがある。技術力の向上においてもこれは同じであろう。下水道分野で働く女性職員のさらなる技術力向上を考える時には、「学ぶ気持ちを高める工夫」に加えて「学ぶ気持ちを低下させる課題を取り除くこと」の両方が特に重要であるという認識から始まった取り組みである。

2. 下水道分野ならではの課題

下水道は、快適で衛生的な生活や環境を守る上でなくてはならない重要なシステムであり、都市の静脈の1つとして今後さらに新しい役割を担っていくことで、持続的な地域経営に貢献することが期待されている。しかしこういった役割に対する理解が不十分な場合、「下水道」という名称につきまといがちな「汚い」「臭い」等のイメージが、仕事に誇りを感じることを邪魔しかねないと指摘されている。

さらに、普及が進んだことにより多くの地域で下

水道は「あって当たり前」のインフラとなり、施設の大半が地下構造物となっているため人目に触れにくいという特徴も相まって、一般市民から極めて意識されにくい状況となっているという課題もある。新たに下水道の仕事に関わる職員は、一般市民と同様、まずは下水道の役割や可能性を知るところから始めなければならない。このプロセスが不足すると、職員の学びを深めたいと思う気持ちが育ちにくいと考えられる。

下水道事業は、事業主体である地方公共団体が住民から使用料を徴収して経営している事業である。事業の持続的な運営のためには、日頃から下水道事業について住民によりよく理解いただくための丁寧な説明が不可欠である。職員が下水道の役割や可能性をよく知ることは、職員の技術力向上のためだけでなく、事業の持続的な経営のためにも重要である。

3. 技術力向上を図る上で障害となりうる 女性特有の悩み

下水道関係の仕事をする上で男女の別が関係ないのは当然であるが、女性特有のライフイベントである「出産」は、その前後の体調管理のために仕事との向き合い方が大きく変化することが多い上に体力や環境などの個人差が大きく、女性にとっては仕事との両立の仕方について先が見通しにくいものである。出産を希望するタイミングが仕事でも学びを深

めて成長したいと思う時期と重なる可能性が高いこと、現状では職場に女性の先輩の数が少なくロールモデルが見つげにくいことも、より見通しを悪くする要因である。さらに育児や介護など本来家族が協力して取り組むべきライフイベントへの対応についても、現状では女性にとってのロールモデルになり得る先輩家族はそれほど多くないと思われる。

女性の少ない職場で働く女性職員は、担当業務に必要な技術についてはそれぞれの職場で充分教授されるものの、こういった女性特有の見通しの悪さについては解消がなかなか難しいのではないだろうか。

4. 「下水道分野で働く女性の会(愛称:GJリンク)」の取り組み

このような課題を少しでも軽減することを目指して、下水道の分野では、官民の別・職種・経験年数などの条件を問わず全ての女性が参加できる「下水道分野で働く女性の会(愛称:GJリンク)」という活動を平成25年度に立ち上げ、筆者がとりまとめ役を務めさせていただいている。以下このGJリンクの取り組みを紹介する。

1) GJリンクの目的と活動概要

GJリンクは、下水道の分野で働く女性たちのつながりの場づくりと、情報交換や情報発信によるスキルアップを目的として活動している。より多くの女性が簡単に参加できるよう登録不要とし、活動の都度、参加出来る方が参加するスタイルとしている。事務局から直接情報配信を希望する場合はメーリングリストへの登録ができ、登録は現在約500名(自治体職員等約400名、民間企業社員約100名)となっている。

活動は現在、次の3つを柱としている。

- 活動① ワークショップの開催
- 活動② 情報誌「GJ Journal」の発行
- 活動③ 就職を検討する学生への情報提供

※HP : <http://www.gk-p.jp/activity/gjlink/>



2) 活動状況

(1) 活動① ワークショップの開催

平成25年度の立ち上げ時から毎年1回程度、

全国から参加できる「全国ワークショップ」を開催している。プログラムは施設見学や講義等による勉強と参加者同士のグループディスカッションで構成しており、施設見学や講義では担当以外の仕事も学ぶことで下水道という事業の全体像を把握することを、またグループディスカッションでは様々な地域や立場の仲間との意見交換を通して視野を広げることを支援している。毎回50~80名程度の参加があるが、女性の先輩の経験談に触れる貴重な機会ともなっており、参加者からは「将来の見通しがよくなった」「仕事へのモチベーションが向上した」等の感想が多く寄せられている。

(令和元年度開催例)

日時：令和元年11月21日(木)、22日(金)

プログラム：

(1日目)

- ・講演「下水道行政の話題、災害対応等について」
- ・講義「都市の豪雨に対する浸水対策について」
- ・グループディスカッション
 - ①「雨に備えて…市民への広報を考えてみよう」
 - ②「あなたの職場での働き方改革」

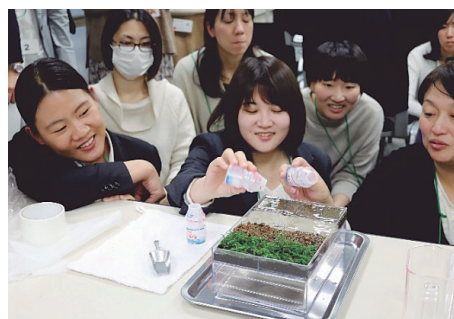


写真-1 講義中の実験の様子



写真-2 グループディスカッションの様子



写真-3 集合写真

(2日目)

- ・施設見学（首都圏外郭放水路、さいたま市上落合雨水調整池）

(2) 活動② 情報誌「GJ Journal」の発行

平成27年度からは一般の方や学生などに下水道を知ってもらうため情報誌として「GJ Journal」を定期的に作成・発行しており、令和2年4月現在で24号まで発刊されている。事務局が作成する定番情報ページ、有志が作成する特集ページで構成する形を基本とし、意欲あるGJが近隣地域にも呼びかけ4～5名のチームを組んで特集ページ作成にチャレンジするケースが多い。



写真-4 表紙の例。GJ Journalは全て、webで閲覧できる

GJ Journalは組織の公式の広報誌ではない特徴を生かし、執筆者には自分の言葉で下水道や仕事内容を紹介することを推奨しており、執筆者は楽しんで参加している。参加者からは「下水道の仕事が市民にとってどのように役立っているか、改めて見つめ直すきっかけ

になった」「わかりやすい説明を考える中で、仕事への理解が高まった」等の感想をいただいている。

また毎号、大変個性的で素晴らしい仕上がりとなっており、それぞれの職場でも「よい記事だった」等褒められることでモチベーションアップにつながっているようである。

(3) 活動③ 就職を検討する学生への情報提供

下水道分野では、水分野への就職を検討する学生への支援を目的として「水ビジネス業界インターンシップ&キャリアセミナー」を（公社）日本下水道協会が開催しているが、GJリンクでは平成29年度からこのセミナー会場内で「女子学生等相談コーナー」を実施している。このコーナーではGJのメンバーが「相談員」として待機し、学生たちからの相談に応じて、個別の組織や会社の説明ではなく水ビジネス業界で働く女性の先輩としてワークライフバランス（WLB）や女性の活躍など個人の経験も踏まえたリアルな状況を伝

えている。

（令和元年度開催例）

- ・実施日：令和元年8月8日13～16時
- ・実施場所：パシフィコ横浜
- ・相談員：自治体、企業等の女性職員等計15名
- ・相談内容：仕事内容、働き方改革の取り組み状況、女性の活躍状況、産休・育休、復帰後のキャリア 等

利用学生からは「仕事だけでなく生活の部分もあわせての『社会人の生活』のイメージが具体的にになった」「女性の先輩からWLBのリアルな話が聞けて安心できた」等の感想が寄せられ、企業の設置する相談ブース等では質問しにくい内容の相談ができたことに対する満足度が高いことがうかがえた。

また相談員からは「学生に自分の体験を語ることで、組織の全体像、自分の仕事の意義や目標を改めて認識することができ、仕事への理解度とモチベーションが高まった」との感想が多く寄せられ、他人への説明の機会の創出が技術力向上のきっかけとなっていることがうかがえる。



写真-5 相談実施状況

5. おわりに

GJリンクはボランティアベースの事務局数名で運営しており、多くの方にご支援をいただきこれらの取り組みを続けることができています。支援して下さる全ての方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

これらの取り組みがきっかけの一つとなって、下水道の仕事をより多くの方に知っていただくとともに下水道分野で働く女性が増え、最終的にはこのような活動が必要なくなることを目指して、これからも可能な限りこの活動を続けていきたい。